

# 依頼発話「来週の飲み会、来て」に付加された「ね」「よ」「よね」が後続発話に与える影響について

著者	西郷 英樹
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	28
ページ	1-21
発行年	2018
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00007847/">http://id.nii.ac.jp/1443/00007847/</a>

## 依頼発話「来週の飲み会、来て」に付加された 「ね」「よ」「よね」が後続発話に与える影響について

西郷 英樹

### 要旨

談話完成テストを実施し、同じ場面での同じ依頼発話に異なる発話末詞「ね」「よ」「よね」が付加されると、その直後にどのような発話の流れが現れるのかを調査した。その結果、付加される発話末詞によって、依頼発話に後続する発話の種類、そしてその割合が変わることがわかった。特に、日本語教育の初級で導入される「ね」と「よ」の違いは顕著であった。「ね」と「よね」の違いは、「ね」と「よ」の差ほど大きくなかったが、「ね」と違い、「よね」には暗示効果があることがわかった。

【キーワード】 依頼、終助詞、発話連鎖、談話完成テスト、日本語教育

### 1. はじめに

筆者は日本語教育での発話末詞(終助詞)の「ね」「よ」「よね」(以下、ネ、ヨ、ヨネ)の教え方に関する研究を行っている。その理由として、まず、ネ、ヨ、ヨネは使用頻度が高く、これらを使わずに自然な会話を成立させることが困難だからである。さらに大切なことに、学習者の日本語レベルを問わず、ネ、ヨ、ヨネをうまく使えていない学習者が圧倒的に多いからである(西郷 2015)。

ネ、ヨ、ヨネの意味機能に関してはこれまで多くの研究がなされてきたが、日本語教育への応用を視野に入れたものが少なく、文法解説は旧態依然のままである。簡潔にまとめると、話し手と聞き手の考えや保有する情報が一致しているかどうかで、ネ、ヨを使い分けるという、日本語教育の現場に携っている人ならよく知っている説明である。しかし、現在の学習者のネ、ヨ、ヨネの使用状況を鑑みると、この説明は、学習者のネ、ヨ、ヨネの意味機能の理解の促進、また運用能力の獲得には十分に貢献できていないといえる。

このような中、筆者はなぜネ、ヨ、ヨネが会話に特徴的に現れるのかという点に

注目し、ネ、ヨ、ヨネが付加された発話に後続する発話の種類を観察すれば、ネ、ヨ、ヨネの意味機能の解明に近づけるのではないかと考えている。

その研究の一環として、2014 年夏から 2016 年秋にかけて談話完成テストを実施し、その調査手順などの詳細を西郷(2016)で紹介した。また西郷(2017)では、本テスト結果を基に、ネ、ヨ、ヨネが付加された話し手の考えを表す発話(例、「今日、めっちゃ暑い」)に後続する発話に関して論じた。本稿の目的は、テ形を用いた依頼発話「来週の飲み会、来て」にネ、ヨ、ヨネが付加された場合、その直後に現れる発話を考察することにある。

## 2. 初級日本語教科書の中の依頼発話＋{ネ・ヨ・ヨネ}

日本語教育への応用にまで踏み込むことは本稿の趣旨ではない。しかし、日本語教育への応用が筆者の発話末詞研究の最終目標であるため、まずは日本語教育でネ、ヨ、ヨネが付加された依頼発話がどのように扱われているか紹介する。

ネ、ヨは日本語教育で初級レベルのかなり早い段階で導入されている。たとえば、日本国内を中心に世界で広く使用されている『みんなの日本語初級』(全 2 巻、全 50 課)では、第 4 課でネが、第 5 課でヨが、以下の例文で導入されている(以下、引用部分の発話末詞をカタカナで表記する)。

- ・毎日 10 時まで勉強します。……大変ですネ。
- ・山田さんの電話番号は 871 の 6813 ですネ。……871 の 6813 ですネ。

(『みんなの日本語初級 I [第 2 版] 翻訳・文法解説英語版』 p. 33)

- ・この電車は甲子園へ行きますか。……いいえ、行きません。次の「普通」ですヨ。
- ・北海道に馬がたくさんいますヨ。
- ・マリアさん、このアイスクリーム、おいしいですヨ。

(『みんなの日本語初級 I [第 2 版] 翻訳・文法解説英語版』 p. 39)

また欧米諸国で広く使用されている『初級日本語げんき』(全 2 巻、全 23 課)では第 2 課にネ、ヨが以下の例文を用いて導入されている。

- ・リーさんのせんこうはぶんがくですネ。
- ・これはにくじゃないですネ。

- ・ とんかつはさかなじゃないですヨ。
- ・ スミスさんはイギリス人ですヨ。

(『初級日本語げんき I [第 2 版]』 p. 66)

これらの例文をよく見ると、ある共通点に気がつく。それは例文がすべて話し手の考えや事実を述べる発話にネやヨが付加されたものだということである。しかしながら、私たちはこのような発話だけではなく、「明日、飲み会に来て{ネ・ヨ}」「飲み会に遅れないで{ネ・ヨ}」など依頼の発話にもネやヨを高い頻度で使用している。

では、なぜ依頼発話＋{ネ・ヨ}が導入時に例文として使われていないのか。その理由のひとつは、積み上げ式のシラバスが大きく関係している。一般的に、ネ、ヨは依頼の表現「～(ください)」に必要なテ形よりも先に導入されるため、ネ、ヨを導入する際に未習のテ形が使えないという事情がある。

しかし、ここで問題が 2 つある。1 つ目に、テ形が導入された後も、依頼発話＋{ネ・ヨ}の意味機能に関する解説がなされていないことである。これは先に挙げた 2 つの教科書だけではなく、そのほかの初級日本語総合教科書にも当てはまる。さらに言えば、中級、上級レベルの教科書でもこの点について明確な解説をしているものはないようだ。

2 つ目の問題として、解説はともかく、依頼発話＋{ネ・ヨ}の例文さえほとんどないことである。『みんなの日本語初級』(全 2 巻)では「それから今晚はおふろに入らないでくださいネ。」(『みんなの日本語初級 I [第 2 版] 本冊』 p. 145)、「東京へ行っても、大阪のことを忘れないでくださいネ。」(同 p. 213)の 2 例、『初級日本語げんき』(全 2 巻)では、「教科書を持ってきてくださいネ。」(『初級日本語げんき I [第 2 版]』 p. 146)の 1 例のみである。依頼発話＋ヨ、依頼発話＋ヨネの例文はまったく見当たらない。

### 3. 先行研究の中の依頼発話＋{ネ・ヨ・ヨネ}

これまでネ、ヨの意味機能に関する研究は言語学や日本語学など日本語教育の隣接領域でも頻繁に行われてきたが、そのほとんどが話者の考えや事実などを表す発話にネやヨが付加されたものを基にした議論であり、依頼発話＋{ネ・ヨ}に関する記述は非常に少ない。また、管見の限り、依頼発話＋ヨネについて正面から論じている先行研究はない<sup>(1)</sup>。

依頼発話＋ネの意味機能に関する数少ない議論は、研究者間の主張にそれほど違いはなく、聞き手から同意が得られるという話し手の態度を表す、と大雑把にまとめることができよう(陳 1987; 益岡 1991; 守屋 2006 など)。この説明は聞き手と話し手の認知状態を照らし合わせ、ネを選択したという考え方である。ナズキアン(2005)の議論はこのような話し手と聞き手の認知状態から離れ、依頼発話にネを付加することで、相手に協力や理解を求めている話し手の態度を表すことができるとしている。

依頼発話＋ヨの意味機能は、益岡(1991)とナズキアン(2005)の主張に近い。依頼発話にヨを付加することによって、益岡は依頼の気持ちをより強く表すことができるとし、ナズキアンは「話し手の一方的な態度や働きかけを表す」(p. 170)ことができるとしている。陳(1987)は、より一歩踏み込んだ説明をしている。「そのようなことが聞き手にとって必要なことであるという認識を話し手がもっていて、その必要性を聞き手にも認識させる」(p. 100)場合に依頼発話にヨを付加すると述べている。

Saigo (2011)は、依頼発話にネ、ヨ、ヨネがそれぞれ付加されたときの意味機能を発話連鎖の観点から論じている。依頼内容を聞き手がすでに知っている場合、または知らなくても容易に承諾できると考えられる場合に、聞き手から承諾を引き出そうとネを付加するとしている。この例として、大きな犬が近づいてきた際の「襲ってきたら、助けてネ。」(p. 51)を挙げている。この後に続く聞き手の承諾とは、「当たり前でしょ。」「分かってるよ。」などだろう。次に、依頼内容を聞き手が知らない場合やまたは容易に承諾が得られない(と話し手が予想できる)場合に、聞き手から文脈に適切な応答を引き出す目的で、ヨを付加するとしている。例として、2時間かけて作ってあげたクッキーを友達が残した場面での「全部、食べてヨ。」(p. 41)を挙げている。ここでの適切な応答とは、「ごめんごめん。食べる食べる。」などが考えられよう。最後に、依頼内容が文脈に適切な応答で広げられる価値があることへ同意を求める場合、依頼発話にヨネを付加するとしている。この「文脈に適切な応答で広げられる価値」をより分かりやすく「依頼発話の背後にある暗示」と言い換えてもよいだろう。筆者は、この暗示効果がネのスコープに入っている「依頼発話＋ヨ」から引き出されると考えている(西郷 2015; Saigo 2011)。Saigo は、依頼発話＋ヨネの例として、義理の母が家にやってくる当日の朝に妻が夫に言った「7時

までに帰って来てヨネ。」という発話を挙げている。聞き手である夫は基本的に承諾を引き出すネの直接的な効力に反応すればよいが、ネ発話に埋め込まれているヨの暗示効果に反応して、「分かってるよ、母さんと二人きりになりたくないでしょ。」(p. 46)など暗示を明示化することも考えられよう。

井上(1993)はネ、ヨが付加された依頼発話と音調との関係を、写真撮影の際の「動かないで」(p. 344)という発話例を基に論じている。この発話にネや上昇調のヨが付加された場合は、発話時から動くことがないように注意をうながす意味になるが、ヨが下降調になると、被写体の人が動いた、動いている、動こうとしている、など話し手の意向と反する状況が存在することを表すとしている。

この井上の議論と多くの共通点を持つ研究に蓮沼(1997)がある。蓮沼は「おばあちゃんのところではお行儀よくしなさいよ↑」(p. 584)などの発話例を用いながら、一般的に上昇調のヨは発話時に聞き手がその場で行う動作の指示ではなく、一般常識として取るべき行動、または未来にとる行動への指示を表すとしている。下降調のヨに関して、蓮沼は「たまには、掃除ぐらい手伝ってよ↓」(p. 585)などの発話例を用いながら、聞き手が話し手の要求をきちんと理解できていない場合に下降調のヨが用いられ、非難や苛立ちのニュアンスを持つことも多いと述べている。

#### 4. 談話完成テスト〈拡大版〉実施内容

2014 年夏から 2016 年秋にかけて、談話完成テスト<sup>(2)(3)</sup>を、日本語母語話者(NS)、日本語学習者(NNS)を対象に実施し、分析対象データを NS、NNS それぞれ 50 人分集めた。テスト協力者の詳細は以下の通りである。

表 1 テスト協力者

NS	50 人(女 43 人/男 7 人)で、全て筆者所属機関の学部生。近畿地方出身が全体の 70.0% (35/50 人)。
NNS	50 人(女 37 人/男 13 人)で、その内訳は留学生別科に在籍する短期交換留学生 39 人、学部留学生 4 人(全て韓国語母語話者)、大学院留学生 7 人(全て中国語母語話者)。短期交換留学生の日本語レベルは、中級前 22 人、中級後 8 人、上級前 7 人、上級後 2 人(筆者勤務校日本語プログラムにより実施されたプレースメントテストに拠る)。

本談話完成テストでは、4 種類の同じ場面での同一発話内容に、ネ、ヨ、ヨネがそれぞれ付加された場合、その後どのような発話が続くのが自然か、テスト協力者に想像してもらい、その発話のやりとりを書いてもらった。

本稿での分析データは次の 1 場面での母語話者の回答である。

場面. 大学キャンパスでまき(女)がサークル仲間のゆか(女)を見かける。

まき: あ、ゆか！

ゆか: あ、おはよ。

まき: あっ、来週の飲み会、来て{ネ、ヨ、ヨネ}。←指示発話



指示発話(=ネ、ヨ、ヨネが付加されている発話)の後に 4 行分の自由記入スペースを設けた。以下の図 1 は指示発話にヨが付加されたものである。

場面. 大学キャンパスでまき(女)がサークル仲間のゆか(女)を見かける。	
まき:	あ、ゆか！
ゆか:	あ、おはよ。
まき:	あっ、来週の飲み会、来てよ (↓/→ or ↑)。
(ゆか):	飲み会? 何のやつやけ?
(まき):	サークルの集まりのやつ! 連絡してない?
(ゆか):	あーなんかラインしてたかも
(まき):	それぞれ! 一緒にいこうー!

図 1 談話完成テストの回答例

同図の左端の( )内は発話者であり、提示場面の登場人物のどちらを発話者にするかはテスト協力者に自由に決めてもらった。また指示発話の右横に{↓/→ or ↑}を設け、ネ、ヨ、ヨネをどのような音調で考えたか当てはまるほうを丸で囲んでもらった。

## 5. テスト結果

### 5.1 後続発話タイプ

本テストで得られた回答を分析した結果、依頼発話+{ネ・ヨ・ヨネ}に後続する発話の種類は大きく以下の①～⑪に分類できた。以下、後続する発話の種類を「後続発話タイプ」と呼ぶこととする(西郷 2017)。各タイプの右横の[ ]は発話者が聞き手(依頼された側)なのか話し手(依頼した側)なのかを表している。

- ①承諾タイプ：[聞き手] 明らかな承諾を含む発話
- ②断りタイプ：[聞き手] 明らかな断りを含む発話
- ③すでに断りタイプ：[聞き手]すでに断りを伝えた内容の発話
- ④初耳タイプ：[聞き手] 聞くまで知らなかったことを伝える発話
- ⑤保留タイプ：[聞き手] 依頼に対する返答を先延ばしする発話
- ⑥質問タイプ：[聞き手] 依頼に対する質問
- ⑦思い出しタイプ：[聞き手] 思い出しを表す発話
- ⑧コメントタイプ：[聞き手] 依頼内容に対するコメント
- ⑨謝罪タイプ：[聞き手] 明らかな謝罪を含む発話
- ⑩無関係タイプ：[聞き手] 依頼発話とまったく関連性のない発話
- ⑪連続タイプ：[話し手] 依頼発話の後に自分で話を続けている発話

表2は、ネ、ヨ、ヨネの別に上述の後続発話タイプの割合をまとめたものである。

表2 「来て{ネ・ヨ・ヨネ}。」と後続発話タイプの割合

	承諾	断り	すでに断り	初耳	保留	質問	思い出し	コメント	謝罪	無関係	連続	計
来てネ	38	26	2	14	10	2	4	0	0	0	4	100
来てヨ	4	36	0	2	14	34	0	0	0	2	8	100
来てヨネ	42	10	0	8	12	8	6	4	2	0	8	100

(%)

この結果の中から顕著な違いが見られた箇所を中心に、以下、考察を進める。

## 5.2 「来てネ」と「来てヨ」の違いを考える

これまでの多くの発話末詞研究で、ネとヨは同じ枠組みの中で論じられることが多かった。ともに会話の中に非常に高い頻度で現れる言語要素である一方、対照的な意味機能を持っていると考えられてきたことも、その理由のひとつであろう。日本語教育でも（半ば暗示的にはあるが）対照的な意味を持つ言語要素として解説されている。そこで、本節では「来てネ」と「来てヨ」を取り上げ、後続発話タイプの観点から意味機能の違いを考察する。



### 5.2.1 承諾タイプから考える

承諾タイプが「来てネ」と「来てヨ」の後に現れた割合を比べてみると、ネ発話(=「来てネ」)の後が38%だったのに対して、ヨ発話の後は4%のみであった。それぞれの発話例を以下紹介する。発話例の右にある( )内の情報は、左からテスト協力者通し番号、出身県、年齢、男(M)女(F)の別を表している。

【「来てネ」⇒承諾タイプ(聞き手)の2/19例 (=全19例の内の2例という意味)】

例1. 「行くよ。今から楽しみでしかたない。」(NS40 和歌山 20F)

例2. 「おっけー。行く行く！どこでやるの？」(NS30 山梨 18F)

【「来てヨ」⇒承諾タイプ(聞き手)の2/2例】

例3. 「もちろん！」(NS3 大阪 20F)

例4. 「いいね、行きたい。」(NS45 大阪 19F)

この結果から「来てヨ」⇒承諾タイプという流れの状況は連想しにくく、「来てネ」⇒承諾タイプという流れの状況は連想しやすいことがわかる。この結果を逆算して、「来てネ」の意味機能を考えると次のようになるであろう。聞き手がすでに飲み会のことを知っている場合、または知らなくても承諾が見込める場合、話し手は依頼発話にネを付加する傾向にあると言える。例1は聞き手がすでに飲み会があることを知っているときの応答だと考えられる。例2は例1と比べると聞き手がその場で初めて飲み会があることを知った意味合いが強い例である。

「来てネ」の後に現れた承諾を、①すでに知っていた飲み会に参加することへの承諾、②その場で初めて知った飲み会に参加することへの承諾、③どちらか判別がつかない承諾、の3つに分類してみたところ、①が68.4% (13例)、②が5.3% (1例)、③が26.3% (5例)であった。この結果を見る限り、指定した場面での「来てネ」の場合、聞き手がすでに飲み会について知っているとは解釈される傾向が高いと言える。

一方のヨはどうだろうか。承諾の割合の低さ(4%)から、容易に承諾が得られないと考えている場合、話し手は「来て」にヨを用いる傾向が強いと言えそうだ。容易に承諾が得られない場合は次の2つに大別できるであろう。1つ目は、聞き手がすでに知っているこの飲み会に参加しないだろうと話し手が考えている場合である。2つ目は聞き手が飲み会自体をまだ知らない場合である。この場合、いきなり

飲み会に参加するように言われても、聞き手は行くか行かないかの判断をする前に飲み会についての詳細な情報が必要であろう。そのため、[依頼発話+ヨ]の直後には承諾が現れにくいと考えられる。この点については、ほかのタイプで後述する。

## 5.2.2 仮説A

5.2.1 の考察を以下に簡潔にまとめ、仮説Aとする。

### 【仮説A】

- a. 聞き手(依頼された側)が(i)すでに飲み会があることを知っているとき、または(ii)知らなくても飲み会に参加する可能性が高いと話し手(依頼した側)が考えたとき、話し手は「来て」にネを付加する傾向がある。
- b. 聞き手(依頼された側)が(i)飲み会があることを知らないとき、あるいは(ii)知っていても飲み会に参加する可能性が低いと話し手(依頼した側)が考えたとき、話し手は「来て」にヨを付加する傾向がある。

## 5.2.3 仮説Aの妥当性を考える

承諾タイプの割合から導き出された仮説Aは、「来てネ」と「来てヨ」それぞれの質問タイプ、初耳タイプ、連続タイプ、思い出しタイプの調査結果からも、その妥当性が高いことを述べる。

### 5.2.3.1 質問タイプ

「来てネ」の後に聞き手の質問が現れた割合が2%だったのに対して、「来てヨ」はその17倍の34%であった。

【「来てネ」⇒質問タイプ(聞き手)の1/1例】

例5.「えっ何で？」(NS4 京都 19F)

【「来てヨ」⇒質問タイプ(聞き手)の2/17例】

例6.「え、来週??誰くるんー？」(NS1 大阪 19F)

例7.「えー、どこでやるん？」(NS29 兵庫 19F)

「来てネ」と比べ、「来てヨ」の後の質問の割合の高いのは、テスト協力者が、ヨ

の使用で、聞き手(依頼された側)がその場で初めて飲み会について聞いた、もしくは、まだ参加するかどうか決めあぐねている、という解釈をしたことを示している。つまり、飲み会への(不)参加を決める前にその詳細を知りたいと考えるのがより自然な流れだからである。例6と例7はまさに飲み会の詳細を聞いている質問である。

反対に、すでに飲み会への参加を決めている場合、飲み会の詳細について質問することは比較的少ないと思われる。そのため、質問タイプは「来てネ」との相性がさほど良くないと言える。「来てネ」の後には質問が1例(例5のみ)現れていたが、それは飲み会に誘われる理由を聞いている質問であり、飲み会の詳細を聞いているものは皆無であった。

### 5.2.3.2 初耳タイプ

「来てネ」の後に初耳タイプが現れた割合が14%であったのに対して、「来てヨ」はその7分の1の2%であった。

【「来てネ」⇒初耳タイプ(聞き手)の2/7例】

例8.「え？来週、飲み会なん？」(NS20 奈良 20F)

例9.「えっ、私誘われてないよ。」(NS26 京都 21M)

【「来てヨ」⇒初耳タイプ(聞き手)の1/1例】

例10.「え、何それ？聞いてない！」(NS14 山口 20F)

「来てネ」の後の初耳タイプが「来てヨ」よりも多いという結果は、聞き手がすでに飲み会について知っている場合に多く用いられる「来てネ」の特徴と一見矛盾している。しかし、どんな場合に、聞き手(依頼された人)がその場で聞いた飲み会が初耳であることを話し手(依頼した人)に述べるだろうか。一般的に考えて、聞き手が初耳であることをわざわざ表明するのは話し手がそう思っていないときではないだろうか。言い換えれば、聞き手にとって初耳の情報だと話し手が知っている場合、聞き手はわざわざ「その飲み会、知らなかった！」などとあまり言わないのではないだろうか。このように考えると、初耳タイプの結果も、飲み会について聞き手がすでに知っている場合には「来てネ」が、知らない場合には「来てヨ」が使われる傾向があるという仮説Aの妥当性を高めることになるだろう。

### 5.2.3.3 連続タイプ

「来てネ」の後に現れる連続タイプが4%であったが、「来てヨ」はその2倍の8%であった。

【「来てネ」⇒連続タイプ(話し手)の2/2例】

例 11. 「あの〇〇先輩も呼んだからさ！」(NS23 大阪 22F)

例 12. 「ほんまに。ゆかがおらんとおもんないやん。」(NS33 兵庫 21F)

【「来てヨ」⇒連続タイプ(話し手)の4/4例】

例 13. 「ゆかが気になってる留学生のマイクも来るってさ。」(NS25 兵庫 19M)

例 14. 「いい感じの居酒屋らしいよ」(NS33 兵庫 21F)

例 15. 「あんまり人数集まってないねん。」(NS24 大阪 20F)

例 16. 「みんな用事あって、人数足りんのよ。」(NS43 大阪 18F)

ネ発話が4%で、ヨ発話が8%と、それほど大きな差異ではないかもしれない。しかし、筆者はこの小さな違いにも「来てネ」と「来てヨ」の違いが見え隠れしていると考ええる。この違いは、話し手が、聞き手の飲み会に参加する可能性をどの程度だと考えているか、に関係がある。つまり、聞き手の参加する可能性が低いと話し手が考えている場合、またはその可能性が未知の場合は、聞き手が参加したくなるような(参加せざるをえないと思うような)説明を聞き手に提供する必要性を話し手は感じるだろう。そこで、話し手は自分の依頼発話の直後に、(聞き手の返答を待たず)そのような説明を続けたと考えられる。一方、聞き手の参加する可能性が高いことがすでにわかっている場合、(補足説明的な意味合い以外に、)わざわざ聞き手が参加したくなるような情報を提供する必要性はそれほど感じないだろう。

### 5.2.3.4 思い出しタイプ

「来てネ」の後に現れる思い出しタイプの割合が4%であったのに対して、「来てヨ」が0%であった。

【「来てネ」⇒思い出しタイプ(聞き手)の2/2例】

例 17. 「あー、前言ってたやつか。」(NS50 香川 19M)

例 18. 「あー忘れてた。何時だっけ？」(NS42 大阪 20M)

この結果にもネ発話とヨ発話の違いが垣間見える。つまり、すでに聞き手が飲み会について知っていることを連想させるネの典型的な意味機能の影響で、テスト協力が(ひねりを加えて)思い出しタイプを作例したと考える。言うまでもないが、思い出すという行為はすでに知っていたことにしか起こらない現象である。

### 5.3 「来てネ」と「来てヨネ」の違いを考える

ヨネも、ネおよびヨ同様、会話の中で使用頻度の高い発話末詞のひとつである。しかし、ネ、ヨとは違い、日本語教科書、特に初級レベルの教科書の中ではほとんど目にする事のない言語要素でもある(西郷 2011)。

ヨネは、一般的に確認という意味機能を持つと指摘されている(伊豆原 2003; 中田 2017)が、「今日、天気いいヨネ。」「これ、美味しいヨネ。」などのように確認とは呼べない用法も多い。また「今日、天気いい{ネ・ヨネ}。」「これ、美味しい{ネ・ヨネ}。」など、ネ発話とヨネ発話の間に明確な意味機能の違いを見つけるのが容易でないものも多い。

本節では「来てネ」と「来てヨネ」の後に現れた後続タイプの種類、そしてその割合の違いから、これら2つの発話の違いを探っていく。

#### 5.3.1 承諾タイプと断りタイプから考える

##### 5.3.1.1 承諾タイプ

「来てヨネ」の後には、「来てネ」(38%)と同程度の割合の承諾が現れた(42%)。

【**再掲**】: 「来てネ」⇒承諾タイプ(聞き手)の 2/19 例】

例 1. 「行くよ。今から楽しみでしかたない。」(NS40 和歌山 20F)

例 2. 「おっけー。行く行く！どこでやるの？」(NS30 山梨 18F)

【「来てヨネ」⇒承諾タイプ(聞き手)の 2/21 例】

例 19. 「うん。行く行く。めっちゃ楽しみ。」(NS12 兵庫 21F)

例 20. 「行くに決まってるやん！楽しみ！！」(NS47 大阪 19F)

この結果から、ヨネの意味機能はネと近いと言えよう。しかしながら、ヨネにはヨの意味機能も含まれているため、ネとヨネの意味機能は何かしらの違いがあると考えるのが論理的であろう。

### 5.3.1.2 断りタイプ

次に、本テスト結果で、「来てネ」と「来てヨネ」の違いが最も顕著であった断りタイプを見てみよう。「来てネ」の直後に同タイプが現れたのは26%であった。一方、「来てヨネ」の直後は10%であった。

【「来てネ」⇒断りタイプ(聞き手)の2/13 例】

例 21. 「あ、ごめん、その日彼氏とデートやわ。」(NS29 兵庫 19F)

例 22. 「あ、それが、用ができちゃって…」(NS7 新潟 20F)

【「来てヨネ」⇒断りタイプ(聞き手)の2/5 例】

例 23. 「あ、ごめん その日は大事な用事が…」(NS44 大阪 20M)

例 24. 「ごめん！バイト入ってよ。」(NS47 大阪 19F)

この結果から、「来てネ」は「来てヨネ」よりも誘いが断りやすい文脈で使用される傾向が高いということがわかる。言い方を変えれば、「来てヨネ」には断りにくい何かしらの効力があると言える。「来てヨネ」にあって「来てネ」にないものがヨであることを考えれば、断りにくい効力を発揮しているのはヨであると言えよう。第3章で紹介した Saigo (2011)での議論で、依頼発話＋ヨネには「依頼発話の背後にある暗示」効果があると述べた。このヨネ発話の暗示効果が「来てヨネ」の断りにくい効力と深く関わっていると考ええる。

### 5.3.2 仮説 B

5.3.1 の考察を簡潔にまとめ、以下の仮説 B を提案する。

【仮説 B】

「飲み会、来てネ」と比べ、「飲み会、来てヨネ」はヨの効力で[この飲み会に参加すべきだ]という暗示が含まれており、聞き手は断れない圧力をより強く感じる。

### 5.3.3 仮説 B の妥当性を考える

断りタイプほどの差異はないが、「来てネ」と「来てヨネ」の間に見られた質問タイプ、コメントタイプ、連続タイプ、初耳タイプの割合の違いが仮説 B の妥当性を高める根拠となり得ることを示す。これらの後続発話タイプは、共通して、ヨネ

のヨの効力である〔この飲み会に参加すべきだ〕という暗示に反応している形跡が垣間見えるのである。

### 5.3.3.1 質問タイプ

「来てネ」の直後に質問タイプが2%しか現れなかったのに対して、「来てヨネ」の直後には同タイプが8%現れた。

【**再掲**】:「来てネ」⇒質問タイプ(聞き手)の1/1 例】

例 5. 「えっ何で？」(NS4 京都 19F)

【「来てヨネ」⇒質問タイプ(聞き手)の4/4 例】

例 25. 「それって、行かなきゃだめなの？」(NS39 兵庫 19F)

例 26. 「来週の飲み会の場所どこやっけ？」(NS2 奈良 20F)

例 27. 「だれが来るの？」(NS17 滋賀 20F)

例 28. 「男、来るん？」(NS29 兵庫 19F)

例 25 の「それって、行かなきゃだめなの？」はヨネ発話内のヨの「飲み会に参加すべきだ」という暗示に反応している非常にわかりやすい例だと考える。つまり、この暗示が飲み会に行かなくてはいけない理由が何なのかと聞き手に思わせ、この質問をさせたということである。この質問の後、話し手が強制ではないが、来てほしいと述べ、聞き手は参加を承諾している。

例 26 および 27 の発話から始まる4行の作成会話の中ではどちらも明確な参加の承諾あるいは断りは見られなかった。例 26 では「来週の飲み会の場所どこやっけ？」の返答を話し手から受けた後、聞き手は「何時からやっけ？」と質問を続けている。例 27 では「だれが来るの？」に対する返答を話し手から受けた後、聞き手は「どうしようかな。」と述べている。例 28 の「男、来るん？」では作成会話の最終行に話し手が「来なかったら無言電話するからな？」と述べ、聞き手が参加しないと予想している話し手の考えが述べられている。これらを考えると、例 26 から 28 はすべて、聞き手の間接的な断りの表明(=参加したくない気持ちの表明)だと解釈できまいか。〔この飲み会に参加すべきだ〕という暗示を含むヨネ発話には直接的な断りの表明はしにくい。そこで、このような質問という形を用いた間接的な断りを選択しているのではないかと考える。「来てネ。」で、このような間接的な断りの回答

がまったく無かったことも、この間接的な断りはヨネのヨの効力だと言ってよいと考える。

### 5.3.3.2 コメントタイプ

コメントタイプは「来てネ」の直後が0%で、「来てヨネ」の直後が4%であった。この一見取るに足らない違いの中にも、ネ発話にはないヨネ発話の特徴が表れていることが分かる。

【「来てヨネ」⇒コメントタイプ(話し手)の2/2 例】

例 29. 「えー、だってそれ〇〇も来るんでしょー。」(NS4 京都 19F)

例 30. 「分かってるよ」(NS50 香川 19M)

例 29 と例 30 はどちらも「来てヨネ」の「この飲み会に参加すべきだ」という暗示に対する聞き手の反応だと考える。例 29 の「えー」は相手の発言に納得できない部分があること示している。「だって」は相手の意見などに反論する際、その理由を述べる前に現れる談話標識である。このような表現を用いて聞き手(誘われた側)は参加したくない強い気持ちを明らかにしているのである。例 30 は聞き手の「分かってるよ」の後、話し手の「とか言って、すぐすっぽかすやん。」という発話を挟んで、聞き手が「仕方ないやん、忙しいもん。」と述べている。この流れを見る限り、初めの「分かってるよ」は承諾の表明ではなく、「この飲み会に参加すべきだ」というヨの暗示に反応し、「(そんなことは言われなくても) 分かってるよ」という若干突き放したような返事をしたと考えるのが自然ではないだろうか。例 29 と 30 が「来てヨネ」ではなく、「来てネ」でも同じようにこのようなコメントタイプでの強い返しが現れたらどうか。今回の結果で、ネ発話の後にはコメントタイプが皆無であったことをもう一度述べておく。

### 5.3.3.3 連続タイプ

連続タイプは「来てネ」の直後が4%で、「来てヨネ」の直後が8%であった。

【**再掲**】: 「来てネ」⇒連続タイプ(話し手)の2/2 例】

例 11. 「あの〇〇先輩も呼んだからさ！」(NS23 大阪 22F)

例 12. 「ほんまに。ゆかがおらんとおもんないやん。」(NS33 兵庫 21F)



【「来てヨネ」⇒連続タイプ(話し手)の 2/4 例】

例 31.「ゆかが好きな先輩たちも来るらしいよ。」(NS26 京都 21M)

例 32.「この前ラインしたやつ」(NS33 兵庫 21F)

この 2 つの発話の 4%の違いも非常に小さなものである。しかし、ネ発話よりもヨネ発話のほうが連続タイプが後続する割合が高かったのは、やはりヨネのヨの効力が影響していると考ええる。つまり、[この飲み会に参加すべきだ] というヨの暗示に次発話で自ら反応したと考えることはできまいか。言い換えれば、[この飲み会に参加すべきだ] という暗示の理由を次発話で明示化しているのである。もちろん例 11 や 12 のように、暗示効果のない「来てネ」の後に、飲み会に参加すべき理由を話し手が続けて述べることもある。その場合、「来てネ」と言った後に、参加すべき理由も言ったほうがよいととっさに思ったかもしれないし、または暗示での圧力を感じさせるヨネの使用を避けたと考えることもできよう。会話をおこなっているのは、ロボットではなく、人間なのである。

#### 5.3.3.4 初耳タイプ

初耳タイプは「来てネ」の直後が 14%で、「来てヨネ」の直後が 8%であった。

【**再掲**】:「来てネ」⇒初耳タイプ(聞き手)の 2/7 例】

例 8.「え？来週、飲み会なん？」(NS20 奈良 20F)

例 9.「えっ、私誘われてないよ。」(NS26 京都 21M)

【「来てヨネ」⇒初耳タイプ(聞き手)の 2/4 例】

例 33.「え、来週飲み会あるの？」(NS51 石川 19F)

例 34.「飲み会??」(NS31 兵庫 20F)

なぜ「来てヨネ」が「来てネ」よりも初耳タイプの発話例が少なかったのだろうか。筆者は次のように考える。「来てネ」と比べ、「来てヨネ」に後続する初耳タイプの割合が低いのは、[この飲み会に参加すべきだ] という暗示効果を持つヨネ発話と初耳タイプとの相性がネ発話ほど良くないからである。この理由として、話し手が [この飲み会に参加すべきだ] というある意味強い暗示を含む「来てヨネ」を使用するときは、(そのような暗示効果がない「来てネ」と比べ、) 聞き手がすでに飲み

会について知っていることがその前提となる場合が多いからであろう。

#### 5.4 音調と後続発話タイプの関係

第4章で述べたように、テスト内の指示発話の右横に{↓/→ or ↑}を設け、ネ、ヨ、ヨネをどのような音調で考えたのか当てはまるほうをテスト協力者に丸で囲んでもらった(図1参照)。

場面：大学キャンパスでまき（女）がサークル仲間のゆか（女）を見かける。

まき： あ、ゆか！

ゆか： あ、おはよ。


まき： あっ、来週の飲み会、来てよ (↓/→ or ↑)。

(ゆか)： 飲み会？ 何のやつやけ？

(まき)： サークルの集まりのやつ！ 連絡してない？

(ゆか)： あーなんか ライン してたかも

(まき)： それぞれ！ 一緒にいこうー！



【再掲】図1 談話完成テストの回答例

以下は、その結果を表にしたものである。本表の見方であるが、たとえば、「来てネ」の後続発話タイプが承諾の場合、「来てネ」のネを平調もしくは下降調(以下、平調も含め↓)と考えたテスト協力者が10人、上昇調(以下、↑)と考えた人が9人いたことを示している。

表3 ネ/ヨ/ヨネ×後続発話タイプ×音調

後続発話タイプ	来てネ		来てヨ		来てヨネ	
	→↓	↑	→↓	↑	→↓	↑
承諾	10	9	2	0	11	10
断り	4	9	5	12	3	2
初耳	3	4	0	1	1	3
保留	2	3	4	3	4	2
連続	0	2	1	3	3	1
質問	0	1	9	8	3	1
思い出し	2	0	0	0	0	3
すでに断り	1	0	0	0	0	0
無関係	0	0	1	0	0	0
コメント	0	0	0	0	2	0
謝罪	0	0	0	0	1	0
[記入なし]	0	0	1	0	0	0
小計	22	28	23	27	28	22
合計	50		50		50	

(人)

この表を見る限り、後述する点(表内の太線部分)を除いては、特定の後続発話タイプと音調にそれほど強い結びつきはないと言えよう。たとえば、先ほど例に挙げた「来てネ」の承諾タイプの場合、「来てネ↓」が10人、「来てネ↑」が9人で、同タイプがどちらかの音調と強く結びついているとは言えない。つまり、「来てネ」のネの音調が↓であれ、↑であれ、それほど大差ない割合で承諾が現れるということである。

しかし、表内の太線で囲んだ「来てネ」および「来てヨ」の後の断りタイプのみが↓、↑間に明らかな差異が見られた。[ネ発話⇒断りタイプ]の場合、↓が4人だったのに対して、↑が9人であった。[ヨ発話⇒断りタイプ]の場合、↓が5人だったのに対して、↑が12人であった。つまり、ネ発話、ヨ発話ともに、↓のときに現れる断りタイプが↑のときの半分以上であることがわかった。この結果の理由を考えるのはそれほど難しくはない。↑は疑問の際に現れる典型的な音調であるため、そうではない↓と比べ、聞き手は断りやすい状況である。反対に、↓(「来てネ↓」「来てヨ↓」)は聞き手に依頼内容の承諾を押し付ける効果があり、聞き手は断りにくい状況となる。

では、話し手は一体どのような意図で↓もしくは↑を選択するのであろうか。本テスト結果の分析から、聞き手が飲み会のことをすでに知っていたかどうかと音調の選択には関連性がないことがわかった<sup>(4)</sup>。第3章で紹介した井上(1993)と蓮沼(1997)のヨの音調に関する主張に沿って考えると、「来てヨ↑」はまだ聞き手が参加するかどうか話し手が知らず、来るように注意を促している発話、「来てヨ↓」は参加するつもりのない聞き手に話し手の要望をきちんと理解するように注意を促している発話だと説明できるだろう。しかし、本テスト結果を基に、この考え方の妥当性を論じることはできない。この点は今後の課題としたい。

## 6. おわりに

談話完成テストを実施し、依頼発話「来週の飲み会、来て」にネ、ヨ、ヨネが付加された場合、その直後にそれぞれどのような発話の流れが続くのかを調査した。その結果、直後に現れた発話(後続発話タイプ)は、11の異なる種類に大きく分類できることがわかった。この結果を基に、「来てネ」と「来てヨ」、そして「来てネ」と「来てヨネ」の意味機能の違いを論じた。

「来てネ」と「来てヨネ」の意味機能の違いは、「来てネ」と「来てヨ」の意味機能の違いと比べ、それほど明らかなものではなかった。しかし、ネ発話とヨネ発話の後続発話に見られた一見取るに足らないような小さな差を切り捨てず考察することで両発話の微妙な差を浮き彫りにしようと試みた。この試みが成功したかどうかは、読者の方々の判断に委ねたい。

最後に、本稿で行った考察は、筆者が数年前から行っている発話末詞に関する研究と同様、談話レベルの考察である。これは、文レベルでの考察が主体であったこれまでの多くの発話末詞（終助詞）研究の成果だけでは、日本語学習者のネ、ヨ、ヨネの運用能力の向上、そして、その指導法の開発は難しいと考えたからである。「継続は力なり」という言葉がある。今後も引きつづき、談話レベルでのネ、ヨ、ヨネの研究を続けていきたい。

## 注

- (1) 深尾まどか(2005)は命令文にヨネが付加された発話について言及している。
- (2) 本テストの内容、実施手順・方法などの詳細は西郷(2016)を参照されたい。
- (3) 自然発話データの使用が主流になりつつ言語研究の流れの中で、なぜ今さら談話完成テストなのか。この問いに、西郷(2016)は、以下のように答えている。「自然発話データは本物の会話を分析・考察できることがその利用の最大の利点であるが、会話参加者を取り巻くさまざまな環境的、物理的要因、また彼らの心理的、認知的要因に影響を受けて現れた言語データであるため、会話の構造が非常に複雑で、その分析・考察自体も複雑なものにならざるをえない。筆者の研究動機が日本語教育の現場への応用・還元であることを考えると、ネ、ヨ、ヨネの意味機能の違いをよりわかりやすく際立たせる必要性も感じ、一旦自然発話データの分析から離れ、場面や協力者の属性を操作しやすい談話完成テストで内省データを収集することに決めた。」(pp. 10-11)
- (4) 「来てヨ」の作例会話から明らかに飲み会のことを聞き手が知っているとは判断できたのは50例中11例であった。そのうち、↑を選んだテスト協力者が6人、↓を選んだ人が5名いた。次に明らかに飲み会のことを知らないとは判断できたのは10例であった。そのうち、↑を選んだ人、↓を選んだ人がともに5人であった。「来てネ」の作例会話から明らかに聞き手が飲み会のことを知っているとは判断できたのは50例中23例であった。そのうち、↑を選んだ人が11人、↓を選んだ人が12名いた。次に明らかに飲み会のことを知らないとは判断できたのは15例であった。そのうち、↑を選んだ人が10人、↓を選んだ人は5人であった。

## 参考文献

- 伊豆原英子(2003)「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』 51 卷 2 号 pp. 1-15 愛知学院大学
- 井上優(1993)「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」：命令文・依頼文を例に」『国立国語研究所報告 105 研究報告書 14』 pp. 333-360 秀英出版
- 西郷英樹(2011)「日本語教科書での終助詞「よね」の扱いに関する一考察」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 21 号 pp. 89-114 関西外国語大学留学生別科
- 西郷英樹(2015)「プロフィシェンシーと「ね」「よ」」『プロフィシェンシーを育てる 3 談話とプロフィシェンシー』(鎌田修・嶋田和子・堤良一編) pp.112-145 凡人社
- 西郷英樹(2016)「終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察 - 大規模談話完成テスト調査報告 - 」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 26 号 pp. 101-127 関西外国語大学留学生別科
- 西郷英樹(2017)「「ね」「よね」「よ」発話と後続発話タイプ異なる 2 つの発話内容を用いて」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 27 号 pp. 9-34 関西外国語大学留学生別科
- 陳常好(1987)「終助詞 - 話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞 - 」『日本語学』 第 6 卷 10 号 pp. 93-109 明治書院
- 中田一志(2017)「終助詞「よね」の機能 - 直接形を中心に - 」『日本語・日本文化研究』 (27) pp. 1-15 大阪大学大学院言語文化研究科
- ナズキアン富美子(2005)「終助詞「よ」「ね」と日本語教育」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ(編)『言語教育の新展開 pp. 167-180 ひつじ書房
- 蓮沼昭子(1997)「終助詞「よ」の談話機能 - その 2 - 」『日本語教育論文集 - 小出詞子先生退職記念 - 』 pp. 581-599 凡人社
- 深尾まどか(2005)「「よね」再考 - 人称と共起制限から」『日本語教育』 125 号 pp.18-27 日本語教育学会
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 守屋三千代(2006)「日本語の終助詞使用：日英対照の観点より」『日本語日本文学 16』 pp. 19-32 創価大学日本語日本文学会
- Saigo, H. (2011) *The Japanese Sentence-final Particles in Talk-in-Interaction*,

Amsterdam : John Benjamins.

#### 参考日本語教材

『初級日本語げんき I [第 2 版]』(2011). The Japan Times.

『初級日本語げんき II [第 2 版]』(2011). The Japan Times.

『みんなの日本語初級 I [第 2 版] 本冊』(2012). スリーエーネットワーク.

『みんなの日本語初級 II [第 2 版] 本冊』(2013). スリーエーネットワーク.

『みんなの日本語初級 I [第 2 版] 翻訳・文法解説 英語版』(2012). スリーエーネットワーク.

#### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15K02496 の助成を受けたものです。

(hsaigo@kansaigaidai.ac.jp)